

製品名: サイクリン E1 (リン酸化 Thr395) ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab04524**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、ラット、マウス
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください (12 ヶ月有効)。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:5000-1:20000
分子量	48kDa

抗原情報

遺伝子名	CCNE1
別名	CCNE1; CCNE; G1/S-specific cyclin-E1
遺伝子 ID	898.0
SwissProt ID	P24864
免疫原	抗血清は、ヒトサイクリン E1 の Thr395 のリン酸化部位付近の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 361-410

背景

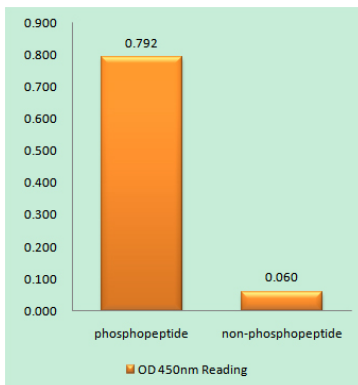
この遺伝子によってコードされるタンパク質は、高度に保存されたサイクリンファミリーに属し、そのメンバーは細胞周期を通じて

タンパク質存在量の劇的な周期性によって特徴付けられます。サイクリンは CDK キナーゼの調節因子として機能します。異なるサイクリンはそれぞれ異なる発現および分解パターンを示し、各有糸分裂イベントの時間的調整に寄与します。このサイクリンは CDK2 と複合体を形成し、その活性が細胞周期の G1/S 期移行に必須である CDK2 の調節サブユニットとして機能します。このタンパク質は G1-S 期境界に蓄積し、細胞が S 期を進むにつれて分解されます。この遺伝子の過剰発現は多くの腫瘍で観察されており、染色体不安定性を引き起こし、腫瘍形成に寄与する可能性があります。このタンパク質は、ATM 遺伝子座にマッピングされた核タンパク質である NPAT タンパク質のリン酸化に関連し、関与していることが判明しました。NPAT タンパク質は、細胞周期の G1/S (開始) 遷移の制御に不可欠です。PTM: GSK3 による Thr-395 のリン酸化と CDK2 による Ser-399 のリン酸化は、ユビキチンプロテアソーム経路による分解を促進します。DNA 損傷時にリン酸化されますが、おそらく ATM または ATR によるものです。類似性: サイクリンファミリーに属します。サイクリン E サブファミリー。サブユニット: CDK2/CDK タンパク質キナーゼのメンバーと相互作用して、セリン/スレオニンキナーゼホロ酵素複合体を形成します。サイクリンサブユニットは、複合体に基質特異性を付与します。網膜芽細胞腫結合タンパク質 3 および網膜芽細胞腫様タンパク質 1 と相互作用する。CDK2、CABLES1、CCNA1 との複合体を形成する (類似性による)。UHRF2、CDK2、CCNE1 からなる複合体の一部である。組織特異性: 精巣および胎盤で高発現。気管支上皮細胞では低発現。

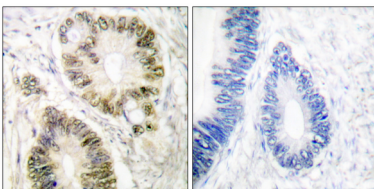
研究分野

Cell_Cycle_G1S;Cell_Cycle_G2M_DNA;卵母細胞減数分裂;p53;がんにおける経路;前立腺がん;小細胞肺がん;

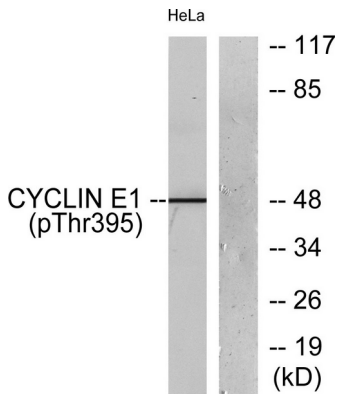
画像データ



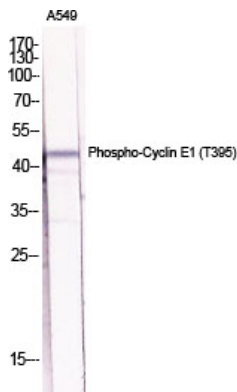
サイクリン E1 (リン酸化 Thr395) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定法 (リン酸化 ELISA)



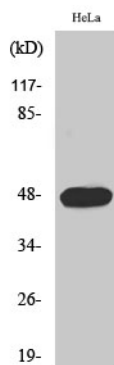
サイクリン E1 (リン酸化 Thr395) 抗体を用いたパラフィン包埋ヒト大腸癌の免疫組織化学染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした状態。



パクリタキセル 1 μ M 60%処理した HeLa 細胞ライセートの、サイクリン E1 (リン酸化 Thr395) 抗体を用いたウェスタンブロット解析。右レーンはリン酸化ペプチドでブロッキングされている。



リン酸化サイクリン E1 (T395) ポリクローナル抗体 (1: 2000 希釈) を用いた各種細胞のウェスタンブロット解析



ホスホサイクリン E1 (T395) ポリクローナル抗体 (1: 2000 希釈) を用いた HeLa 細胞のウェスタンブロット解析